

横光利一とベルリン・オリンピック

中井祐希

一 横光利一とベルリン・オリンピック

一九三三年アドルフ・ヒトラー政権が誕生。ヒトラーは当初オリンピックを「ユダヤ人の陰謀」と非難し、開催に難色を示していた。しかし、ヨーゼフ・ゲッベルスらの助言もあり、オリンピックを国威発揚の場と位置づけていく。オリンピックスタジアムを含めた公共事業に莫大な資金を投入し、ユダヤ人に対する人種差別の隠蔽、ボイコットに向かいつつあったアメリカ・イギリスに対する工作活動等、ナチス・ドイツは、オリンピック開催に相応しい国であるかのように演出していった⁽¹⁾。ベルリン・オリンピックそのものに着目すれば、黒人差別が激しい状況の中、陸上競技四冠を達成したジェシー・オーエンスの活躍⁽²⁾、朝鮮半島出身者で日本代表としてマラソン金メダルを獲得した孫基禎の苦悩⁽³⁾、レニ・リーフェンシュタール監督作『民族の祭典』と『美の祭典』（一九三八年公開）、ベルリン大会から行われた聖火リレーは一九三九年ナチス・ドイツ軍が侵攻するルートの事前調査であったこと等を思い起こさせる。一九三六年のベルリン・オリンピック

クは、現在の（そしてこれからの）我々に対しても様々な問題を投げかけていくだろう。このような国際的祭典、帝国主義下のベルリンにおいて、横光利一は何を見て、何を感じ取ったのだろうか。

そもそも横光の渡欧の契機はベルリン・オリンピックの視察を東京日日新聞・大阪毎日新聞社に勧められたからであった。横光はパリを中心に滞在し、ベルリンに到着したのは七月二四日であった。そしてオリンピックの閉会を待たず、八月一日ベルリンを発つ。

『旅愁』第一篇・第二篇（改造社、一九四〇・六―七）がパリを主な舞台としているせいか、横光の欧州体験も「ヨーロッパパリ」という図式で理解されがちであった。海外紀行文「欧州紀行」（『欧州紀行』創元社、一九三七・四）に関する先行研究を概観しても、横光が長期滞在していたパリに比重を置いた論考が多数見られる。しかし、渡欧の目的であったオリンピックや、当時のナチス・ドイツの状況をリアルタイムで経験している点は注目に値する。横光のベルリン体験について言及した数少ない論考の一つに栗坪良樹のものが挙

げられる。栗坪は横光のバリ滞在とベルリン滞在とを比較し、「認識する表現者、無国籍の立場を堅持する横光と、国籍日本を意識せざるを得ない横光との格闘によって、次第に宙ぶらりんの日本国が浮上してくるのが、約半年の渡欧体験であり、それを決定づけたのが、ドイツ体験であった」と結論付けている（『横光利一のドイツ体験——パリからベルリンへ』『国文学 解釈と教材の研究』一九九〇・一一、57頁）。しかし、「欧州紀行」の描写だけを頼りに、横光のベルリン体験を考察していくことには注意が必要である。横光のベルリン体験は、オリンピック開催時期のベルリンという特異なトピクスでの体験でもあったからである。

そこで本稿は、「欧州紀行」でのベルリン滞在時の描写に加え、国内外の言説を重ね合わせながら、横光の視線とその特異性、また認識の変化を浮き上がらせていく。そして横光のベルリン体験がどのように『旅愁』へと展開されていたのかについて考察を行っていく。

二 「一個の自然人」から日本の〈代表〉者へ

「たった一人のアスリートの競技する身体が、オリンピックが抱え込む過積載気味の意味と期待とを担うという、恐ろしいまでの落差こそが、〈代表のスポーツ〉の栄光であり興奮であり恐怖であろう」と日比嘉高が指摘するように（『代

表する身体』は何を背負うか——一九三三年のロサンゼルス・オリンピックと日本・米国・朝鮮の新聞報道』『メディア—移民をつなぐ、移民がつなぐ』河原典史・日比嘉高編、クロスカルチャー出版、二〇一六・二、240頁）、オリンピックは〈代表〉選手の身体をナショナルな身体へと変貌させる。これはスポーツに関心の無かった人々にも〈代表〉選手に対し、まなざしを与える程強力なものであった⁷⁾。

しかし〈代表〉となるのは、競技者のみに留まらない。ベルリン滞在中の横光も日本の〈代表〉者として期待とまなざしを引き受けていく。オリンピック開幕直前の七月三〇日、ベルリンで開催されたIOC（国際オリンピック委員会）総会にて、次回一九四〇年のオリンピック開催地が東京に決定する。八月一日付の『東京朝日新聞』号外（写真¹⁾）には、大きく見出しに「ベルリンの日本人／みんな万歳だ！」とあり、現地での興奮の様子を伝えている。しかし、横光はそのような記事と異なる光景を「欧州紀行」に書き記していた。

次回のオリンピックが日本と決定する。逢ふ日本人は互に顔を見合せた形だ。どことなく誰もがつかりしてある。（中略）これから始まらうとするベルリンのオリンピックのことなど、今はどうでもよいといふ気持ちになつて来る。／日本人の集る街の食事場もまた一種異様な興奮の仕方である。／「いよいよ来たね。」／「うむ。」

／かういふ会話の次には誰も黙つて何も云はない。ヨーロッパ各国の視線が同時にこちらを向いたのだ。(七月三〇日)

ベルリンの日本人が「万歳」している様子ではなく、「互に顔を見合せ」「がっかりしてゐる」様子を横光は目撃する。「ヨーロッパ各国の視線」と記していることにも注意した

い。海外や世界中の視線ではなく「ヨーロッパ各国の視線」、つまり近代化の過程において、西洋へまなざしを送ってきた日本・日本人がこれからは否応なくまなざしを向けられる立場になっていくのだという横光の認識と緊張感が読み取れる。馬術競技出場者だったパロン西こと西竹一は、同時期の妻宛ての書簡にて「オリンピック村は、大したものだ。今度日本の番だそうだが、これを見ない人には見当がつくまい。出来ることやら、われわれは日本に決つたと聞いて冷汗をかいたわけだ」と記している(大野芳『オリンポスの使徒――



【写真1】『東京朝日新聞』号外、1936.8.1

「パロン西」伝説はなぜ生れたか』文芸春秋、一九八四・七、150頁)。横光と西、共通の認識を有していたことがわかる。横光においては翌日の七月三一日、「カフェーに坐つてゐると、ボーイはわれわれの卓の上に日の丸の旗を置くといふ始末だ。外国の客たちは一斉にわれわれの方を見る。昨日から大舞台に出てゐるやうで少少うるさい」とある。日本人に対する外国人のまなざしが翌日にも継続していることがわかる。

〈代表〉者としてまなざしを向けられ、日本人というアイデンティティを内面化していく横光のベルリン生活はパリ滞在時とは対照的である。横光はベルリン出発直前の七月二〇日、これまでのパリ生活を「私といふ一個の自然人が、この高級な都会の中へ抛り出され、形成されてゆく心理の推移を、偽りなく眺めるのが目的」(七月二〇日) だつたと総括している。パリ滞在中、横光の世話をしていた読売新聞社特派員松尾邦之助は「彼と一緒に街を歩み、カフェーやキャバレーにも行つたが、彼は、煙草屋に飛びこみ、大声で、「オーイ。たばこー! たばこー! マッチだ、マッチひとつくれ」と、日本語でどなっていた」姿を目撃し(『巴里物語』二〇一〇復刻版)『社会評論社、二〇一〇・一、289頁)、フランス政府給費留学生の丸山熊雄も「レストランなんかでも、お行儀が悪いですよ。誰かが通訳して注文なんかしてると、まどろこ

しいもんですから、「あれが食べたい」なんて言つて、よその人のを指さしたりする。そんなんでみんなが何となく敬遠しちゃつて」と回想している（一九三〇年代のパリと私」鎌倉書房、一九八六・一二、160頁）。パリ滞在中の横光は現地のまなざしをさほど気にしていなかったことがうかがえる。黒田大河は「欧州紀行」の「前半部分での横光の姿勢は、自分自身を対象化して見つめようとするものであったのに対し、『半球日記』（論者注：ベルリン滞在を記した初出時の題名）では他者から見られる自分を意識した言説が多く見られる」と指摘している（『作品としての『欧州紀行』——『旅愁』への助走——『日本近代文学』一九九三・五、79頁）。まなざしを意識し出すターニング・ポイントは七月三〇日、東京オリピック招致決定の報だったといえる。オリピック東京招致成功のニュースは横光を、「一個の自然人」からまなざしを引き受ける日本の〈代表〉者へと変貌させていった。ところで、横光は七月二四日、到着直後のベルリンの様子を次のように記していた。

パリーの町の建物の中を歩いてゐる時には、山の頂きを仰ぐやうな感じであつたが、ここベルリンの建物の下では岩石の谷間を歩いてゐるやうな感じである。町に起伏がなく何処まで行つても同様な町ばかりだ。（中略）パリーの町ではわれわれの眼は市街の彫刻にさ迷ひ、商

店の裝飾に戯れ、マロニエの幹の優雅さに休息し、街街の起伏や人人の上に憩ひ得られた自由さがあつた。しかし、此処では最初に一目見たもの許りが何処までも続くのである。このやうになれば、人の心の鍛錬の仕方は忍耐許りとならざるを得ない。この市街の人人の心が団結のままに動くのも尤もだと思ふ。

パリを「山の頂き」、ベルリンを「岩石の谷間」と例え、画的で整然としたベルリンの様子に横光は困惑する。七月二七日では、「どこもかしこもこれ程掃除の行き届いた街はない。（中略）整理の限りを尽した人物は、団結するより方法はあるまい」とある。どちらも具体的なベルリンの都市の特徴を観察し、そこにファシズム政権化のドイツの思想・政情を読み取っている。同時期にベルリンに滞在していたアメリカ人作家トマス・ウルフも自伝的小説『汝再び故郷に帰れず』（鈴木幸夫訳、荒地出版社、一九五九・三（原著一九三七））において、「大会の華麗さは、まさに圧倒的であり、そのためジョージは息苦しくなり始めるほどだった。その中には何か不吉なものがあつて、巨大な努力の集中、全ドイツの膨大な統合力の中に潜む恐るべき牽引と秩序が感じられた。（中略）あたかも競技それみずから新しき統合力の象徴であり、この新たな力の結果を世界に具体的に示すための手段として（論者注：代表チームが）選ばれたようだった」（441頁）

と記している。横光は「清潔さ」や「団結」、ウルフは「統合力」や「秩序」といった言葉を用い、都市ベルリンとナチス・ドイツとの関係性を読み解いている。

両者の鋭い視点は的を射ていた。当時ナチスとベルリン市当局は外国人訪問者に好印象を与えるため、市町村に訓示を出していた。例えば、空き家の商店に借家人を住まわせ、囚人労働者の労働を禁止、宣伝省の職員が全国の都市を巡回、美化運動・衛生促進運動を行っていた（デイヴィッド・クレイ・ラージ『ベルリン・オリンピック 一九三六 ナチの競技』高儀進訳、白水社、二〇〇八・八（原著二〇〇七）、246―247頁）。ベルリン・オリンピックのオフィシャル・レポートには当時の様子が細かく記されている。

行政の観点からみた準備作業として、輸送の問題や様々な試合会場を想定した道路建設だけに限らず、街や主要道路の祝祭的な装飾もまた行われた。（中略）ベルリン市民はまたオリンピック期間中、ベルリンに祝祭的な空気を与えるため、進んで市当局を手伝った。市内全域特に多数の外国人が滞在していた地区の貸間やアパートのオーナー達は、窓やバルコニーを飾り付けてお互い競い合った。（The Xith Olympic Games Berlin, 1936: official report, Organisationskomitee für die XI. Olympiade Berlin 1936 E.V., W. Limpert, 1937, pp.454

（論者訳）

ベルリン市民も自ら進んで都市を清掃し、訪問者に対してまなざしを向けていったことがわかる。⁹⁾横光は東京のオリンピック招致成功と、ナチスからの訓令を受けた人々、二つのまなざしを受けざるを得ない状況へ陥っていったのである。

三 オリンピックでの横光のまなざし

八月一日ベルリン・オリンピックが開催される。横光と同様に、オリンピックの視察を新聞社から請け負った文学者に、西條八十と武者小路実篤がいた。西條はコロムビア・レコード企画「詩と音楽の旅」の旅行中に読売・朝日両新聞社から、武者小路は朝日新聞社からオリンピック特派員の依頼を受けていた。本章ではオリンピック開会式の観戦記、特に三者が共通して記した入場行進の場面を比較検討していき、横光のまなざしの特異性に迫っていく。¹⁰⁾まずは、西條と武者小路の観戦記である。

●西條八十

草色の衣、爽やけきギリシヤ、紅薔薇のごとき短衣のデンマーク／質朴なるイングランド、黒シヤツのイタリー／見よ、来れり、来れり、翩翩としてひらめく日の丸！／男、女、わがなつかしき同胞選手は微笑しつゝ来れり／彼等（こゝ）とく旅の陽に黒くやけつれど元氣颯

爽。／明るき足どりにて歩み来る／旅にゐて彼等をみる心地は、とほく故国の港を眺むる心地なり／声かけたき、抱きたき、さはれ一瞬にして、一団の姿は／わが眼底より群集のなかに消えたり。（「祖国を賭ける」『読売新聞』号外、一九三六・八・二）

●武者小路実篤

フランス人がナチス式の挨拶をした時何となく涙ぐんだ。平和が感じられたからだ。／二十五番目に日本の諸君が現れる。我等は誇りを以て拍手を送つた。（中略）確に独逸の国民がこの国際競技に捧げた祝典として我等はその隙間のない行動に感動し感心す。／四年後に我等は東京に於て日本人らしくこの祝典を行つて我等国民の行動力を示したいものだと思つた。（「仏人のナチス式」挨拶に涙ぐむ／思ひを東京大会に『東京朝日新聞』朝刊、一九三六・八・二）

西條はヨーロッパ各国の入場行進の様子を冷静に記している。しかし日本選手団が来ると一転、主観的で興奮した描写となつてゐる。そして日本選手団の行進の様子を「明るき足どりにて歩み来る」と評していく。対象に対する温度差を付けることで、日本選手団に同一化した際の興奮を日本人読者へ効果的に伝えることが可能となる。武者小路は一九三六年三月七日、ナチス・ドイツ軍によるライランラント進駐が背景

にあつたため、「フランス人がナチス式の挨拶をした時何となく涙ぐんだ。平和が感じられたからだ」と述べている¹⁾。加えて「四年後に我等は東京に於て日本人らしくこの祝典を行つて我等国民の行動力を示したい」とあり、東京大会へ向けての展望を述べている。このように西條と武者小路の観戦記は、日本や日本選手団に対して概ねポジティブなものであつた。

この両者の内容を踏まえ、横光の観戦記を吟味していきたい。

正面ヒットラーの前まで行進した各国の選手は、その国々の礼をしなければならぬ。しかし、喜ばれた国はドイツ式の宣誓の挙手をした国である。横に正面を見上げつつ進んだ国に、英国と日本がある。誰も黙つてこの二ヶ国には拍手をしない。服装や顔色が明快な国はその美しさのために拍手があがる。オーストリアと米国はむしろ政治的背景として歓呼の声が場内を圧したが、選手を旗手ただ一人より送らぬコスタ・リカはその寂しい孤影のため厚意の波を湧き上がらせた。（中略）中華民国は悉く夏帽を冠つて出て来たが、一斉に揃へた脱帽の美しさは民国の優雅さが感じられる。むしろ日本選手の後半が足乱れ、踏むべからざる芝生を踏んで行進して来るのをみると、オリンピック日本招致が選手に与へた興奮を思

ひやられ手に汗を握るのである。殊に堂堂たるイタリイの行進と拍子湧くが如きその後だ。選手行進の最後はドイツである。各国のうち最も足並み整ひ、白の服色明快で場内の緊張に一層強く輪をしめた観がある。(「オリムピック入場式を観る」『東京日日新聞』号外、一九三六・八・二)

横光の観戦記は日本を中心化せず、大小含め様々な国の行進の様子を詳細に捉えている。特に注目すべきは「日本選手の後半が足乱れ、踏むべからざる芝生を踏んで行進して来る」という一節である(「写真2」参照)。開会式における日本選手団に対する不評と、行進失敗の理由は主に四つあった。一つ目は服装が質素だった点^⑩、二つ目はヒトラーへの挨拶がナチス式でもオリンピック式でもなく観客からは分かりにくい「頭、右」だった点^⑪、三つ目は日本選手団の不仲^⑫、四つ目は西洋式の行進に不



【写真2】 The XIth Olympic Games Berlin, 1936, op.cit., p.554

慣れだった点^⑬である。横光は西條・武者小路両者に比べ、このような行進の乱れを注意深く観察していたことになる。日本選手団の行進が乱れていたという横光の指摘は日本国内で話題となった。「彼は日本選手のだらしなさを指適^⑭し、列は乱れ、礼儀正しくなく、芝生を踏む者もあつたと警鐘を鳴らしたが、まさに新聞記者の役目を奪ひ取つたやうなもの、出かしたりな横光！」(「關無門」「壮絶な空輪リレー」——新聞匿名月評——)『文芸春秋』一九三六・九)、「選手のこのだらしなさは、どこからきてゐるか。日本の国民が、軽薄で、運動選手を何か偉いものであるかの如く、優遇しすぎた結果、彼等から慎しみの感情といふものを取り去り、人間の生地をまるだしにさせたものとみられる」(板垣直子「オリンピック選手の国辱問題」『新潮』一九三六・一二)等である。両者とも横光の指摘を受け、そこから選手達のだらしなさへと結び付けている。しかし、横光は決して日本人選手団がだらしなかつたから足並み乱れたとは記していない。行進の失敗の理由を横光は「オリンピック日本招致が選手に与へた興奮^⑮のためだと記しているのである。西洋からまなざされていふといった意識はここでも継続し、横光の対象への視線や解釈に大きな影響を及ぼしていることが読み取れる。

このようなまなざしを内面化したまま、横光はオリンピック競技を観戦していくことになる。競技開始直後の日本選手

団の成績は振るわなかった。「欧州紀行」八月二日の記述には「日本選手の成績が悪いのでこれを文章に書く気がしない。書け書けと喧しい新聞社の催促を受けるが、ペンを持つ気さうになし」とある。日本選手の不振を目の当たりにしつつも、観戦記を書かなくてはいけないという横光の苦悩が読み取れる。そして翌日の八月三日、連日の日本人選手の不振の原因を横光なりに分析・言語化しようと試みていく。

昨日(二日)も今日(三日)も天気が悪い。家を出る時空を見て降りさうな天気の日、今日は日本は駄目だといつも思ふ。日本人は植物のやうに一片の雲にも皮膚の感覚がちぢむのである。(中略)日本人が自分の記録を誰も出さず敗北してゐる第一の原因は、底から仰ぐ狭い空の曇つてゐることだ。たとへば比較的によい成績をあげた村社と、山本嬢二人の出場の際は太陽が雲を破つて珍しく場内が輝き渡つてゐた。人間が実力以上の活動を希へるのはその時の自然によらねばならぬ。(『日本選手への鬼門』『東京日日新聞』夕刊、一九三六・八・五)

横光は日本人選手の不調を「日本人は植物のやうに一片の雲にも皮膚の感覚がちぢむ」ためだと推論する。そしてその証拠に八月二日、一万メートル競走で四位の村社講平と、女子やり投げ五位だった山本定子の競技の際には「太陽が雲を破つて珍しく場内が輝き渡つて」おり、「人間が実力以上の

活動を希へるのはその時の自然によらねばならぬ」と考察する。他紙と比較してみても、横光のこの観戦記は少々趣が異なる。^[16]横光の天候に対する関心は、七月二六日「晴れたと思ふとすぐ雨だ。雨かと思ふとまたすぐ晴れる。(中略)何もすることがないと思ふと天気ばかりが気懸りなものだ」、八月七日「雨が降つたかと思ふとすぐまた天気だ。私にとつては、今日はレインコートを持つて出ようかどうしようかを考へるのが最大の私の関心事になつて来た」等から、ベルリン滞在中継続していたことがわかる。たしかにパリ滞在時の記述をみていけば横光は頻繁に当日の天気を記している。しかし例えば、四月六日「晴。巴里へ来てから初めての晴天だ。しかし、私の頭の中では、渦が幾つも巻きつづけ、衝突し、崩れ、巻き込み合ひ、不断に変化をつづけていく」というように、天気と自身の心理や身体との関係性についてまでは考察が及んでいない。画一的で代わり映えないベルリンの都市の中で、「晴れたと思ふとすぐ雨だ。雨かと思ふとまたすぐ晴れる」といった天気の変化に横光は関心を向けるようになったのではないだろうか。

ところで、村社講平は一万メートル競走で善戦出来た理由について「スピードを常に織り込んだ走法の技術を身につけた猛練習の中からつかみ出した練習法」にあつたと回想している(『長距離を走りつづけて』ベースボール・マガジン社、

一九七六・七、127—128頁)。村社の四位は太陽が「輝き渡つて」いたためではなく、周到な練習に裏打ちされた「実力」通りの結果であった。もし横光の推論が正しければ八月五日、天候が非常に悪くかつ決勝は夜遅くまで行われていた棒高跳び決勝にて、二・三位に入賞した西田修平・大江季雄の活躍はどのように説明すればよいのだろうか。¹⁷⁾しかしここで重要なのは横光の推論の妥当性を問うことではなく、村社の善戦やその他の日本選手のパフォーマンスの不振を天気という環境要因に結び付けた点にある。そして、環境やトポスが日本人の身体やパフォーマンスに影響を与え、「植物のやうに一片の雲にも皮膚の感覚がちぢむ」といった認識は『旅愁』へ引き継がれていくことになる。

四 『旅愁』に流れる横光のベルリン体験

『旅愁』第二篇冒頭部において、日本人二人がベルリンとパリの優位性について激論を交わしている場面がある(第二篇、225頁)。ベルリンを「団結力」「綜合力」、パリを「自由性」「分析力」と形容していることから、思想上の対立関係にあることが読み取れる。しかし、『旅愁』の物語内容においてドイツやベルリンは前景化されてこない。矢代がパリ滞在後ベルリンへ向かうことは物語序盤から示唆されていた。だが、矢代のベルリン体験は、「パリを発つたのが七月の終りで、

それからベルリンへ行つた一ヶ月の間に、またいろいろの事情でイタリヤまで飛行機で飛んだりした」(第三篇、455頁)と第三篇冒頭部分で回想されるだけである。¹⁸⁾

横光がベルリン体験やオリンピックを描かなかつた理由に、『旅愁』の執筆時期が関係しているだろう。矢代達がパリを旅立つまでを描いた第二篇の連載終了が一九四〇年の四月、日中戦争激化のため、東京オリンピックの開催権を返上したのが一九三八年七月である。ナチス・ドイツに視点を移すと、ナチスのポーランド侵攻は一九三九年九月、一九四〇年四月からは立て続けにデンマーク、ノルウェー、そしてパリを占領下に置いた。『旅愁』初出時点においてベルリンやオリンピックを描くことは、開催されたかもしれない東京オリンピックと、「平和の祭典」であるオリンピックを開催したドイツが積極的な軍事行動に出ているという矛盾を讀者に想起させてしまう。つまり物語現在と執筆時期との「時差」¹⁹⁾に横光は苦悩した結果、矢代のベルリン滞在を省略し、早急に舞台を日本へ移していったのである。

しかし、だからといって横光のベルリン体験が『旅愁』に反映されていないわけではない。横光がベルリン・オリンピックで得た、日本人を植物的存在として措定し、環境によって身体が影響を受けるといった境地は『旅愁』の全篇に貫かれている。例えば、パリ到着間もない頃の矢代のパリ生活の描

写である。

新しい野菜と水ばかりのやうな日本から来た矢代は、当座の間はからからに乾いたこの黒い石の街に馴染むことが出来なかつた。蛙は濡れた皮膚から体内の瓦斯を発散させて呼吸の調節を計るやうに、湿気の強い地帯に住んで来た日本人の矢代の皮膚も、パリの乾ききつた空気にあふと、毛孔の塞がつた思ひで感覚が日に日に衰へ風邪をひきつづけた。(中略) 少し街を歩くと堪らなく水が見たくなつてセーヌ河の岸の方へ自然に足が動いていくのだつた。(第一篇、48頁)

「新しい野菜と水ばかりのやうな日本から来た」矢代は「黒い石の街」パりに馴染めず、部屋に戻ると靴を脱いでしまう。自身を蛙に喩え、慣れ親しんだ水気のある「土」ではなく乾燥した「石」の上を歩かなければならないという身体の違和が描かれている。このような認識は矢代だけに留まらない。東野は久慈との初対面の場面において「日本にあれば僕らはどんなことを考へてゐようと、まア土から生えた根のある樹ですが、ここへ来てれば、僕らは根の土を水で洗はれてしまつたみたいですからね。まア、せいぜい、日本へ帰れば僕らの土があるんだと思ふのが、今はいつぱいの悦びですよ」(第一篇、79頁)と語る。どちらも植物的表現を用いて、パリ到着後の身体の違和を捉えようとしている。また矢代が展開す

る日本論においても、「悪点を数へ上げれば、およそ良い所がどこにあるのかと云ひたいほど数限りもなく澤山にあつた。しかし、も少し考へると、それらの欠点は日本人の美点から生れて来た、他国には見られぬ花の名残りとも見られる球根につづいてゐた」(第一篇、118—119頁)とある。

このような表現手法は第三篇以降も継続していく。帰国後、矢代は自分たちを「立ち対ふ態度を洋式にしてゐるうち、いつとは知れず心魂さへ洋式に変わり、落ちつく土もない、漂流人の旅の愁ひの増すばかりが若者の時代」(第三篇、501頁)と定義づけている。加えて、「落ちつく土もない」ことが『旅愁』の主題である「旅の愁ひ」を喚起する要因であることが示されている。次に矢代の父の死後、実家での場面である。

矢代はまたあたりの風景を眺めてみた。父のゐるときには、自分の背後に父からの長い紐がついてゐて、そこから養分を吸ひ取りつつ、それも知らずに迂闊に見てゐた景色だつた。それが今は、ぷつりと背後の紐は断ち切れて、眼に映る港の建物、船舶、街路の起伏に連る人家の隙間と、直接自分の根を張りわたらせる樹木のやうに、独立してゆくものの切迫した、初初しい悲しみを彼は覚えて来るのだつた。(第四篇、73—74頁)

親子の関係を「長い紐がついてゐて、そこから養分を吸ひ取りつつ」と称している。そして父の死後、その「背後の紐

は断ち切れ「養分」を吸い取ることが出来なくなるため、「自分の根を張りわたらせる樹木のやうに、独立してゆくもの切迫した、初初しい悲しみを彼は覚えて来る」。父という「根」を失ったことにより自身の知覚・認識までもが変容してしまふことが示唆されている。そして矢代は、「先祖の呼吸し、眺め暮して滅び散つた館の跡を見て置きたい」(第四篇、217頁)と思い、父親の故郷である九州へ旅に出る。父親が知覚してきた光景を自身の身体を通して追体験しようとする旅だと言ひ換えることができる。その後、矢代は父の故郷へ着き、山へ登っていく。

矢代は頂きの石の上に腰を降ろして休んだ。黒松の幹の間から海に見えるのが、ここに棲つたものの今もなほする呼吸のやうに和いだ色だつた。葛の葉や群る笹の起伏する上から遠ざかつたむかしのころの面影を想像してみても、たしかにここには、父に繋がるもののかつて刻んだ労苦の痕跡が感じられた。彼は骨箱を松の枝にかけて暫く耳をすませてみた。しかし、今の矢代に通ひ匂つて来るものは、峰から峰をわたつて来る松風の音ばかりだつた。それはもうむかしの響き轟いた矢筒の音でもなければ、叫び倒れるものの声でもなく、肋骨の間を音もなく吹きぬけて行くやうな、冴えとほつたうす寒い、人里はなれた光年の啾啾とした私語であつた。(第四篇、

218—219頁)

矢代は「頂きの石の上に腰を降ろし」、そこでの光景、そして松風の音を聴き、「肋骨の間を音もなく吹きぬけて行くやうな、冴えとほつたうす寒い、人里はなれた光年の啾啾とした私語であつた」と感じる。植物の音である「松風」を「光年の啾啾とした私語」という比喩表現を用い、矢代はそれを実感する。つまり矢代は、そこで暮らしていた先祖達が見て来た光景を追体験することができたのである。山を登る途中「路はしだいに細まり峻しくなつた。矢代は汗をかきかき雑草を靴で踏み跨いで歩いた」(第四篇、217頁)が、先の実感後「山路を下る矢代の足首に草の実が附着して来た」(第五篇、220頁)という第五篇冒頭部は、先祖の土地と矢代の身体との調和を物語っている。²⁰⁾

五 〈身体感覚—認識—トポス〉

一九三八年に横光は「地が揺れる」(『東京日日新聞』夕刊、一九三八・八・七)というエッセーにて次のように述べている。

一度人は地を自分の足で蹴つて飛び上つて見るが良い。必ずまた元の地へ直ぐ落ちる。一分間ほど飛び上つてゐられる人さへ、まだ私は見たことはない。地に足をつけてゐる感覚は、人間認識の根元であることには、今

さら疑ひを容れ得ない。その土地が揺れ動くといふ国と、絶対に不動であるといふ国との認識を、同様だと思ひ得られる人の感覚には、何事かここに誤りもまたなければならぬ。

「地に足をつけてゐる感覚は、人間認識の根元」であり、「土地が揺れ動くといふ国と、絶対に不動であるといふ国」の間では認識が異なっているのではないかとこの考察がなされている。このような（身体感覚―認識―トポス）の関係性は、帰国直後の水原秋櫻子との対談の中でも確認できる。歳時記の話題になった際、横光は「ベルリンで月を見てびつくりしましたね。ドイツ語では月は男性になつてゐるのは尤もだと思つたんです（論者注…ドイツ語での「月」は『*Welt*』）。カツと非常に強い感じがするんです。男といふ感じですよ」と述べている（『対談記』『俳句研究』一九三六・一一二）。この二つの言説で示されているのは、トポス（地）によって、人間の身体感覚や認識が変容してくるといふ点である。前章で確認してきたトポスを移動する際に生じる身体の違和と知覚の変化が、『旅愁』においては植物的表現によつて表象されていくのである。

本稿で確認してきた知見は「欧州紀行」を『旅愁』のサブテキストと定置すると前景化し得ないだろう。「欧州紀行」のバリの描写を一次資料として参照しつつ、『旅愁』の提出

した問題へ迫っていく。このようなアプローチでは当然『旅愁』の舞台にはならなかったベルリンはオミットされていく。しかし日本人を植物的存在とみなし、トポスによつて身体や認識が変容するといったベルリンでの横光の境地は、『旅愁』の水脈で流れ続けているのである。

注

(1) オリンピック開催までのナチス・ドイツの動向は、デイヴィッド・クレイ・ラージ『ベルリン・オリンピック 一九三六 ナチの競技』（高儀進訳、白水社、二〇〇八・八（原著二〇〇七））に詳しく書かれているので参照されたい。

(2) しかし、オーエンスが四冠を獲得したにも関わらず、黒人に対する差別・偏見は改善しなかった。「ベルリン大会は、アメリカにおいては（ほかの国においてと同様）、黒人はある種のスポーツでは解剖学的に有利であるという、当時生まれかけていた紋切り型の考えを強めたが、ニグロは生来、性格と知能が劣っているという紋切り型の考えをそれが打破することはなかった。黒人は短距離競走と跳躍では才能があるかもしれないが、スタミナ、規律、チームワーク、精神的鋭敏さを必要とする競技では白人を凌駕することは決してないだろうと考えられていた」（デイヴィッド・クレイ・ラージ『ベルリン・オリンピック 一九三六 ナチの競技』前掲、51頁）。

(3) 大会中、孫基禎はサインを頼まれるとそこに「KORRIA」

と朝鮮半島の絵を描き、優勝時には「君が代」が自身の国歌であることに悔し涙を流した。また大会終了後、『東亜日報』は孫のユニフォームにある日の丸を塗りつぶした写真を掲載し、それにより朝鮮総統府から発行停止処分が下される。詳しくは、孫基禎『あま月桂冠に涙』（講談社、一九八五・二）を参照。

(4) デイヴィッド・クレイ・ラージは聖火リレー実施の背景について次のように指摘している。「最初はナチの宣伝省によって立案され、ドイツ組織委員会の疲れを知らぬ事務局長のカール・デームによってもっぱら具体化された聖火リレーは、南東および中部ヨーロッパに新生ドイツを宣伝するものに変わった。その地域は、ナチの生活圏（ドイツ拡張主義のスローガン）を提唱する者が欲しがっていた地域だった——そして、やがてドイツの国内軍によって蹂躪された。オリンピックからベルリンに聖火を徒歩で運ぶという一見無害な行事は、その後のあからさまな侵略を予示するものだったのである」（『ベルリン・オリンピック』一九三六 ナチの競技」前掲、9頁）。

(5) 『欧州紀行』でのパリに着目した論考として、中川成美「『欧州紀行』論への試み——横光利一の巴里——」（『立教女学院短期大学紀要』一九八三・一）、山本亮介「自壊（滅）していく文明とともに——フランスの現実とテキストの生成——」（『横光利一 歐洲との出会い——『欧州紀行』から『旅愁へ』』井上謙、掛野剛史、井上明芳編、おうふう、二〇〇九・七）

などが挙げられる。

(6) 女子二〇〇メートル平泳ぎ金メダリストの兵藤（旧姓：前畑）秀子は当時の状況を次のように回想している。

とくに私の場合、勝つことが至上命令のようになっていました。国威発揚の期待はロサンゼルス大会のときより、いっそう強まってきました。けっして大げさではなく、日本中が私に注目していたのです。プレッシャーがかかるのは、むかしもいまも変わりはありませんが、当時は、ナシヨナリズムという厄介なものが加わっていたので、その激しさは、現代とはくらべようがありません。／＼じっさい、私は、もし優勝できなかったら死のう、と考えたほどです。帰りの船から飛び込もうか、いや、私は泳げるから、海では死ねないのではないか、などと本気で考えたのです。（『前畑は二度がんばりました 勇気、涙、そして愛。』こま書房、一九八五・一二、92頁）

(7) 例えば、荒木巍はベルリン・オリンピック終了後オリンピックのユニフォームを着た選手が店の娘を待ち構えていた場面に遭遇し「伯林でどんなことを仕出しかしたのか具体的に知らぬし、知らうと云ふ興味もないが、——またオリンピック選手だと云ふ元ぶつた気持のはづみ、所謂血気の過ちとも言へやうが、かう云ふ粗野な神経や教養の低さを持つてゐるのは、運動選手は何をしてかしたか知れぬと云ふ不安が起つた」と述べている（『オリンピック服と選手』『人民文庫』一九三六・一二）。

(8) 浜田幸絵は『東京朝日新聞』『東京日日新聞』『読売新聞』三紙のベルリン・オリンピックの報道を比較・検討して「四年前(論者注・ロサンゼルス・オリンピック)よりも膨張傾向にあり、自国中心・愛国主義的で扇情的な傾向を強めていた。広告も、記事に呼応して国民意識を喚起する役割を果たした」と分析する(『東京三紙のベルリン大会表象——ナシヨナリズムの肥大化』『日本におけるメディア・オリンピックの誕生——ロサンゼルス・ベルリン・東京——』ミネルヴァ書房、二〇一六・二、203頁)。

(9) 七月二八日、横光はウンテル・デン・リンデンにある横浜正金銀行を訪れた際、老婆が行先を丁寧に教えてくれたエピソードを記している。穿った見方をすれば老婆のこの親切な対応は、ナチスの「外国人訪問者に好印象を与える」といった訓令を内面化した上での行動かもしれない。

(10) 三者のオリンピック観戦記を比較検討した著書に上村直己『西條八十の見たベルリン五輪』(熊本出版文化会館、二〇一二年・七)がある。上村は開会式における観戦記を比較して次のように結論付けている。「実篤と利一はフランス選手団が入場式でナチス式の敬礼をしたことに注目し、強い感銘を受けているが、八十はそれについて触れていない。一方、八十は聖火の劇的効果を強調し、またナチス新国家「ホルスト・ヴェツェル」に深く感動しているが、実篤も利一もそれについて何も書いていない。関心の対象や感情における詩人と小説家の違いが見られて興味深い」(99頁)。本稿も上村と同じ

く三者の観戦記の比較を行うが、重視するのは、横光の開会式における「関心の対象や感情」の要因を突き止めることにある。

(11) しかしフランス代表団の挨拶はナチス式ではなく、オリンピック式の挨拶であった。斜め前に右腕を向けるオリンピック式の挨拶はオリンピック競技場で観戦していた観衆たちにとつて右腕をまつすぐ向けるナチス式の挨拶に見えたため拍手が沸き起こったのである。詳しくは、リチャード・マンデル『ナチ・オリンピック』(田島直人訳、ベースボール・マガジン社、一九七六・三(原著一九七二)、181頁)を参照。

(12) オリンピックに帯同した瀧澤七郎は「我が日本の選手の服装は、近くで見るとは左程でもないが、あの広く高い所から眺めた場合、誠に引き立たぬ。私共が盛んに拍手を送つても、周囲の人達が共鳴せぬ。一寸したことであつたが、実は残念でたまらなかつた。／＼質素も宜いが、次回は大に考へて頂きたいものである」と語っている(『オリムピックを観る』健康之友社、一九三六・一〇、72頁)。

(13) 鎌田忠良『日章旗とマラソン』潮出版社、一九八四・八、271—272頁

(14) 行進順が前回のロサンゼルス大会から役員↓女子選手↓軍人・軍服用者(近代五種・馬術競技者)↓男子選手と変更になったため、軍人・軍服用者からの反発があった(孫基禎『ああ月桂冠に涙』前掲、148—149頁)。澁谷壽光は当時の様子について、「日本軍の行列のつたなさにはあきれ。計

画も悪いにはちがひないが、選手個人のだらしなさも多分に原因をなしてゐる。一番いけないのは指揮者の両氏(論者注：大島鎌吉・清川正二)、其の次が兵隊さん達」と日記に記している(『一九三六年 ベルリンオリンピック遠征記 澁谷壽光の足跡』鈴木幸子編、鈴木幸子、二〇〇四・六、57―58頁)。

〔15〕鎌田忠良『日章旗とマラソン』前掲、272頁

〔16〕武者小路実篤は「しかし日本は負けたが実際見てみると日本の選手はよく闘つた、殊に村社君は孤軍奮闘大いに努めたといつていゝ、最後までよくねばつたフィンランドの選手三人を相手に半分までは先頭をつとめ少しもくたばらず途中で抜かれてもまた抜き返したりした。最後にあゝいふ結果になつたがひとりで頑張つた点は偉いと思つた、(中略)日本程あらゆる方面に優秀な力を示した国民はさうないやうに思ひ負けはしても心丈夫さを感じた」と記している(『莊嚴・日本の奮闘／敗れて悔なし』『東京朝日新聞』夕刊、一九三六・八・四)。

〔17〕当日の会場の様子は次の引用部から伺い知れる。

ところが此の頃また驟雨が沛然と襲来しスタンドは混乱に陥つて棒高跳も或は中止かと思はれるに至つた。／＼しかも此の間熱闘は続けられたが遂に夜陰は迫り照明下の大争覇となつて勝敗は決し優勝の栄冠は惜くも米のメドウスに譲つた。併し日本は西田、大江同成績で西田二位、大江三位を占めた。(陸上競技研究会編『伯林オリムピックの全貌』

一成社、一九三六・一一、59頁)

〔18〕『旅愁』とベルリン・オリンピックの關係性を指摘した論考に金泰暎のものがある。金は『旅愁』第三篇に登場する南という人物は、ベルリン・オリンピックでマラソン三位に入賞した南昇龍の影響があるのではないかと指摘する(『可能性としての「朝鮮」』『横光利一と「近代の超克」』『旅愁』における建築、科学、植民地』翰林書房、二〇一四・一二、127―133頁)。

〔19〕松村良は「旅愁」は作品世界の(時間)に執筆時の(時間)が介入し、その(時差)が作品世界の人物(主に矢代)の「思考基盤」に影響を及ぼし、また「現在時への郷愁」をもたらしという、特異な小説だと指摘している(『横光利一「旅愁」の(時差)』『國學院雑誌』二〇〇四・一一、287頁)。

〔20〕矢代が草や花を踏みしめて歩いていく描写はバリ(ブローニユの森での場面)と日本(矢代が幼少の頃、先祖の土地を訪れた場面)、どちらにおいても確認できる。

少し疲れて手から力を抜くと、たちまち密集して来る海老殻色の茎の弾力に跳ね返されて二人は打ちよせられた。足で踏みつけた茎も二人の過ぎた後方で戻り合ふ音を立ててゐた。(中略)矢代は汗が出て来たが仕方もなく暴暴しく裏白の絡りついた茎を踏みつけて云つた。／＼「水河をわたるのよりこつちの方がよつぽど骨だ。」(第二篇、289―290頁)

山の上の崩れた石垣の間に茂つた羊歯や芒など、靴で

踏みつけ何を知らずに歩いた幼年のころの旅の記憶を呼び起してみても、ただの荒城とより思へないながら、今見れば少しは前とは感慨も違ふであらうと思はれた。(第三篇、542頁)

だとすれば、第五篇の冒頭部「山路を下る矢代の足首に草の実が附着して来た」という描写は矢代の身体とトボスとの関係性において大きなターニング・ポイントだったといえる。

【付記】 引用部の「／」は改行を示す。横光利一の引用部は全て

河出書房新社版『定本 横光利一全集』によった。本稿は二〇一七年三月一日に開催された横光利一文学会第一六回大会（於日本大学）における口頭発表「横光利一とベルリン・オリンピック」の内容に加筆修正を加え成稿したものである。当日、貴重なご教示を下さった方々に、記して感謝を申し上げます。